

小学校における新教科の研究開発動向について (2)

藤 岡 秀 樹*

(1997年6月30日受理)

1 はじめに

前報告(藤岡, 1996b)において, 小学校の「研究開発学校」の研究動向の特色と, 「研究開発学校」の研究の中で筆者が関心を持ち, 注目した実践の代表的事例として, 福島大学教育学部附属小学校の実践を紹介し, 分析を行った。

福島大学附属小学校の実践は, 「特別活動」を廃止し, 各教科と「道徳」で教育課程を構成し, 教科内容と名称の変更を行ったものである。その特徴としては, ①全学年にわたって「図画工作」と「音楽」を廃止して「表現科」を新設した, ②中学年以上で「理科」「社会」「家庭」を廃止し, 「人間科」「地球科」を新設した, ③開発された新教科のみならず既存の教科についても, 内容の絞り込み, 精選化が見られた, ④教科, 学年によって1単位時間の弾力化を図った——の4点が見いだされた。

本論文では, 「研究開発学校」の内, 福島大学附属小学校とは異なった視点で研究を進めている東京学芸大学附属大泉小学校の実践を紹介し, 分析を行うことにしたい。

2 東京学芸大学附属大泉小学校における研究開発

東京学芸大学附属大泉小学校は1995年度から1997年度までの3年間にわたって, 文部省の「研究開発学校」の指定を受け, 現在も研究を推進中である。三石(1996)の分類では, 第5のタイプ(既設教科の中での「総合学習」の設置の試み)に位置づく。以下に紹介する内容は, 東京学芸大学附属大泉小学校(1996, 1997)及び児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校(1995)に基づいている。

(1) 東京学芸大学附属大泉小学校の学力観

東京学芸大学附属大泉小学校は, 学力観として「豊かな学力」を挙げている(児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校, 1995)。この「豊かな学力」は, 社会の変化に主体的に対応するときに生きて働く力としての「豊かな心と確かな学力」を意味している(東京学芸大学附属大泉小学校, 1996)。「豊かな学力」を捉える視点としては, ①一人ひとりの子どもと社会の変化, ②子ども一人ひとりにどんな力を育てるか, ③子どもの生活と論理を大切にする——の3点を挙げている。

* 岩手大学教育学部

「豊かな学力」の内容は、「内容知」「方法知」「自分知」の3つから成り立っている。第1番目の「内容知」は、何を学ぶかということである。学校週五日制への移行などに伴う教材・学習内容の精選化に際して、この「内容知」の見直し・再検討が問われてきている。第2番目の「方法知」は、いかに学ぶか、どう学ぶかという学び方、学習の方法に関するものである。指導法のあり方のみならず、学び方の学習や自己教育力なども関係する。第3番目の「自分知」は、何を学び、それをいかに学んだか。それが自分にとってどのような意味を持つのかということである。自分自身について、あるいはもっと広く人間全体についての理解を進め、自己実現を図るためのものである。小学校低学年の「生活科」では、「自分との関わり」が強調されているが、東京学芸大学附属大泉小学校が提唱している「自分知」も「生活科」の教科目標と通底する部分があると言えよう。

これまでの多くの学力観や学力規定では、「内容知」が中心に据えられていた。東京学芸大学附属大泉小学校では、「方法知」さらに「自分知」という内容まで拡げて捉えている点はユニークであり、意義のあるものであると言えよう。学力を「生きて働く学力」として捉えるならば、児童・生徒が主体となる「自分知」のウェイトが高くなるのは自明であり、教材開発や指導に際しても、「自分知」を念頭に置く必要があるだろう。

「豊かな学力」の課程としては、「生活課程」「基礎課程」「発展課程」の3つを挙げているが、学年の進行につれて、各課程の比重が変化する。「生活課程」は、基本的な生活習慣や自然的・社会的な体験の幅を広げ、生活の知識や技能、感性を磨く課程で、学校教育の土台となるものであり、附属大泉小学校では「広め学習」(後述)が該当する。「基礎課程」は、生活レベルにおける具体的事象や体験を対象化し、主体的な問いかけを通して、概念や思考、知性・理解、合理的・科学的・社会的な見方や技能を育てる課程で、学校教育の中心となるものであり、同校では「つみあげ学習」「はげみ学習」「総合単元」(後述)が該当する。「発展課程」は、生活課程を土台に基礎課程で学んだものを、再び自らの生活や社会と結んで、実践力・実感力として発展・深化させる課程であり、同校では「深め学習」(後述)が該当する(東京学芸大学附属大泉小学校、1996)。

(2) 東京学芸大学附属大泉小学校の教育課程の基本方針

東京学芸大学附属大泉小学校は、「研究開発学校」の指定を受けるまで、約10年間にわたって、「四つの学習」を基に、学習活動が進められてきた(児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校、1995)。「四つの学習」は図1に示すように、「広め学習」「つみあげ学習」「はげみ学習」「深め学習」から成り立っている。

「広め学習」は、豊かな体験へと自己を広げ、生活力を培う学習であり、1・2年生で行われる(週当たり3時間)。一般の公立校の「生活科」と趣旨やねらいが似ている。生活習慣や自然的・社会的体験を重視している。

「つみあげ学習」は、学び合いと振り返りを通して学び方を培う学習であり、全学年で行われる。一般の公立校の各教科の学習に該当するが、各教科の学習時数は、やや縮減され、学習内容の見直しと精選が行われている。

「はげみ学習」は、基礎的・基本的な内容を習得し学び方をいっそう確かにする学習であり、全学年で行われる(週3回、各15分)。「国語」の漢字力や「算数」の計算力のような基礎的スキルの習熟学習であり、一人学びの方式で進められる。

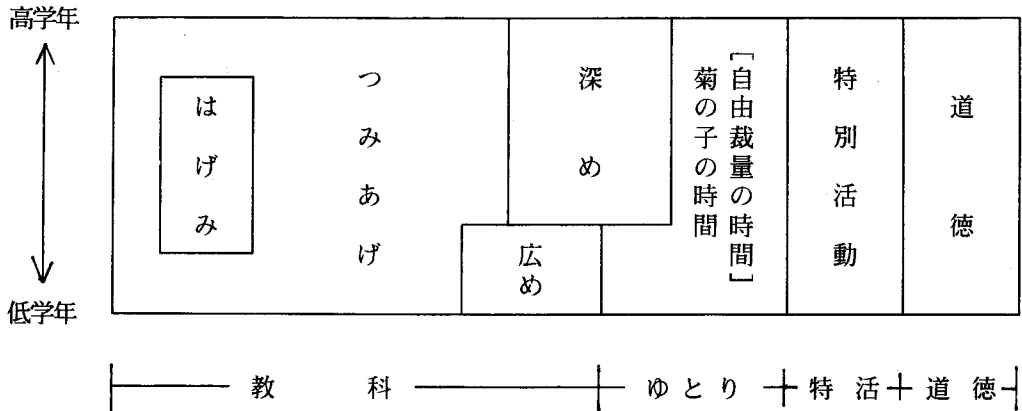


図1 東京学芸大学附属大泉小学校の「四つの学習」の構造

「深め学習」は、自己の疑問やこだわりから課題や問題を設定し追究する学習であり、3年生以上で行われる（週当たり1時間の固定時間と学校行事その他の時間を利用）。子どもの興味・関心を中心に学習テーマを選択する課題解決型の学習である。

次に、1995年度に文部省の「研究開発学校」の指定を受けてからの実践について述べてみよう。研究開発の初年次（1995年度）では、「国際」「環境」「人間」の3領域からなる「総合単元」を設けている。「総合単元」は、教科の枠を取り払い、「国際」「環境」「人間」の3つの視野から、子どもの生活に密着した学習内容を選定し、子どもたちの生活と学習を結び付けることをねらいとしている。各学年とも各領域に年間12時間（「総合単元」の年間総時数は36時間）を充てている（東京学芸大学附属大泉小学校、1996）。

研究開発の2年次（1996年度）では、「総合単元」を「総合学習」と改め、低学年の「広め学習」も総合学習の視点から見直し、同時に低学年としての発達段階を考慮し、生活習慣や自然的・社会的体験を重視する「総合学習（広め）」と改めた。また、従来の「道徳」及び「特別活動」の学級活動、委員会活動をまとめ、「心の教育の時間」を設定した（低学年：週当たり1時間；中・高学年週当たり2時間）。「心の教育の時間」は、子どもの生き方教育に資する教科外領域としての特色を一層豊かなものにする時間として位置づけられている（東京学芸大学附属大泉小学校、1997）。1997年度の教育課程（年間授業時数）を表1に示そう。学校教育法施行規則第24条の2に定められている各教科の授業時数と比較してみよう。表1から、一般公立校と比べて、低学年では「生活科」がなく、週当たり1時間分を増やした「総合学習（広め）」となっていること、「社会」「理科」「体育」が標準時数の2/3であること、「算数」「音楽」「図工」「家庭」が約1割程度の時数縮減が見られること、「国語」の時数を大幅に縮減していること（特に低学年）¹⁾——など全学年を通して、各教科の時間数を縮減して「総合学習」に充てていることが見いだせる。

前報告（藤岡、1996b）で取り上げた福島大学教育学部附属小学校では、教科内容と名称の変更に基づく教育課程の大幅な再編（例えば「人間科」「地球科」「表現科」）を行い、学習時間の弾力化も行ったが、附属大泉小学校では、教科の枠組みを変えず、できるだけ既設の教科を維持しながら、精選化を図って「総合学習」の時間を確保するように努めているのが特徴であると言えよう。

表1 東京学芸大学附属大泉小学校の教育課程
(年間授業時数; 1996年度)

区 分		1年	2年	3年	4年	5年	6年
各教科学習	国語	182	227	227	227	163	163
	社会			70	70	70	70
	算数	153	158	158	158	162	162
	理科			70	70	70	70
	音楽	60	60	60	60	60	60
	図工	60	60	60	60	60	60
	家庭 習 体 育					60	60
総合学習		136	140	70	70	70	70
心の教育の時間		34	35	70	70	70	70
総 授 業 時 数		693	750	855	855	855	855

註1: 学校行事, クラブ活動, 委員会活動の時間数は含まれていない

註2: 国語・算数には, 朝の「はげみ学習」の時間を含んでいる

(3) 「総合学習」の概要

研究開発の初年次では「総合単元」として, 「国際」「環境」「人間」の3領域を取り上げ, 基礎課程である「つみあげ学習」と発展課程である「深め学習」とを結び付ける学習として位置づけていた。しかし, 実践を行うことによって, 発展課程である「深め学習」の内容も十分に取り込むことが可能であることや体験的に子どもに追究させるためには十分な時間設定が必要であることを見だし, 研究開発の2年次では中・高学年で設定していた「深め学習」を取り込み, 「総合学習」に改め, さらに時間数を増加させている(36時間→70時間)。また, 子どもの発達段階から学習内容を捉え直し, 「国際」「環境」「人間」の3領域の融合の必要性も見いだしている。

初年次に設定した「総合単元」の3領域の特徴と3つの「知」(「内容知」「方法知」「自分知」)との関係をまとめたものを表2に示す。初年次では, 子どもの発達段階に即した各領域の特徴と3つの「知」の関係が明らかにされてはいないが, 2年次では3つの発達段階に分けて, 分析がなされている。低学年では, 直接体験を重視し, 「浸る」活動を学習の中心に据えている。「人」「物」「環境や文化」に「浸る」ことを通して, 「存在」「違い」を知ることや「自分」に気付くことができるような単元展開を講じている。

表3-1, 表3-2に低学年の年間指導計画(1996年度)を示す。「国際」の単元では, “内なる国際化”に視点を向けて研究開発を行っている。前年度は, 韓国学校との交流やインド人を招いてカレーを手で食べて, 異文化理解や食文化の学習を行ったが, 直接交流の機会が制限されたり, 交流自体がイベントに陥りがちになったことの反省を踏まえて, 帰国子女学級との交流を研究開発の2年次では組み入れている。学習過程としては, 存在を知る→興味・関心を持つ→互いを知る→いっしょに○○する→共に造る・作る・歌う, という過程をとっている。

「人間」の単元では, セルフ・エスティーム(自尊感情)に焦点を充てて開発を試みている。

表2 3つの「総合単元」の特徴

	国 際	環 境	人 間
捉え 豊かな 学力の	多様な質をこえて、互いの共通性、普遍性、そして独自性を認め合って、ともに生きる。	自分生活と環境との結びつきを見つめ、自ら働きかける中で価値を選択する。	人間そして、かかわりを意識して違いを認め合い、よりよい生き方を追求する。
内 容 知	異文化、自国文化 そして、異文化間 ○異文化に関わり、自分の視野を広げる ○自国文化を見つめ、価値の再発見をする ○異文化間において共通性・普遍性、独自性を見いだす	自分と環境（自然・社会） ○循環 環境やエネルギーの有限性、環境の中の人間（自分）との深いつながり ○共存 すべての生き物は関わりを持ち、バランスを保って生きる	ヒト、人間、人間関係 ○ヒトとしての特徴や良さの発見 ○人間的な成長 ○自分をとりまく多様な人間関係
方 法 知	○さまざまな形のコミュニケーション ○共に創造する活動 ○人、文化との直接の関わり合い	○自ら関わり、親しむ活動を通して、自然環境や生活環境を見つめ表現する ○視点を変えて自分と環境との関わりを見る ○アクトローカリー（Act Locally）	○個人差・違い、そして個性を生かす ○人権や人格を考えて取り組む ○多様な人間関係に関わる ○創造的、表現的に活動する
自 分 知	受容と共生 ○違いを違いとして認める ○受容から共生へと一人ひとりの生活に生きる ○自国文化、異文化の良さを感じ、尊重する	見方、関わり方が変わる ○自然の良さの発見 ○自分たちのくらしとの関わり方を再発見する ○人間生活と自然の関係に目を広げ価値を選ぶ	自分の見方、考え方 ○ありのままの自分の姿 ○自分の個性 ○夢や願いの実現 ○集団の中での自分の生かし方
総合 単元 の開 発の 柱	●異文化、自国文化を踏まえた異文化間の単元構成 ●定期的、継続的な交流 ●コミュニケーション活動と創造活動の開発 ●発達特質を踏まえた実践力と実感力の重視	●循環、共生に関わる単元構成 ●自ら働きかける実感的な活動 ●自分の生活に根ざし、多様な側面をもって価値選択できるもの	●体と心、命、そして人間のつながりのすばらしさに出合う単元構成 ●一人ひとりの良さと違い（個性）を互いに認め合う ●発達特質に合わせて、自己を対象化できるもの

表 3-1 第 1 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
石神井公園 たんけん [環境+人間]	○内容知 ・季節によって木や生き物の様子が異なる。 ○方法知 ・季節の移り変わりをとらえるために同じ場所同じ条件で見えていく。 ○自分知 ・身の回りの自然を大切にしていこうとする。
ごみ箱が なくなった！ [環境+人間]	○内容知 ・ゴミは生活するとどうしても出るものである。 ・ゴミの量は、クラス全体だと大きくなる。 ○方法知 ・ゴミを少なくするために、無駄をなくす。 ○自分知 ・身の回りの物を大切にしていこうとする
たくさんの ともだち [国際+人間] 8 時間	○内容知 ・ゆり組の友達は外国のことをよく知っている。 ○方法知 ・友達を増やすためにいろいろなコミュニケーションの方法をとる。 ○自分知 ・様々な場面で友達を認め、大切にしようとする。
えがおがいっぱい —じぶんの手— [人間]	○内容知 ・手には人によって形や大きさが異なる。 ○方法知 ・自分の手をよく知るために友達の手や動物の手と比べる。 ○自分知 ・自分にできることを増やしていこうとする。
えがおがいっぱい —へんしんしよう— [人間]	○内容知 ・顔にはいろいろな表情があり、その時の気持ちが表情に表れる。 ○方法知 ・自分のなりたいものになりきるために、お面を着けたり変身したりする。 ○自分知 ・自分の気持ちを素直に表現し、自分の役割を果たしていこうとする。
アンニョン —かんこくがっこうの ともだち— [国際+人間]	○内容知 ・韓国と日本の食べ物や遊びの共通点や相違点に気付く。 ○方法知 ・仲良くなるために言葉以外の様々なコミュニケーションの方法をとる。 ○自分知 ・友達から学ぶことをたくさん見つけたり、友達を増やそうとする。

註：配当時間に関しては、研究紀要に記されていたものだけを記載した。

表 3-2 第 2 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
学校の中の 自分の木 [環境+人間]	○内容知 ・学校には様々な木があり、成長したり変化したりしていることに気付く。 ○方法知 ・木と親しむために、実際に触ったり比べたり木の実を食べたりする。 ○自分知 ・木を大切にしていこうとする。
ぼくってわたしって 一ぶんしんをつくらうー [人間] 8 時間	○内容知 ・友達の良さや今まで気付かなかった自分を知る。 ○方法知 ・自分について知るために、友達や家族からの情報を得る。 ○自分知 ・友達の良さを見つけようとする。
ぼくってわたしって 一大きくなったよー [人間]	○内容知 ・心身ともに成長してきた自分に気付く。 ○方法知 ・成長を振り返るために記録を集めるなどの情報収集する。 ○自分知 ・心身ともに成長してきたことに自信を持ち、意欲的に生きていこうとする。
おじいちゃん、 おばあちゃんと一緒に (養護学校の友だち) [人間]	○内容知 ・学校のまわりにはいろいろな施設があり、いろいろな人が利用している。 ○方法知 ・詳しく知るために、直接話を聞いたり、一緒に関わりをもつ。 ○自分知 ・人間として誰もみな同じように生きている。
アンニョン ーいっしょにあそぼうー [国際+人間]	○内容知 ・韓国には日本とは違う遊びがあるが、同じ様な遊びもある。 ○方法知 ・仲良くなるために、遊びを教え合ったり、一緒に遊ぶ。 ○自分知 ・言葉が通じなくても、一緒に遊ぶことで分かり合える。
コマブスミダ ーいっしょにつくらうー [国際+人間]	○内容知 ・同じ目的を達成するためには互いの共通理解が必要である。 ○方法知 ・同じ目的を持って活動するために、身振りなど多様なコミュニケーションの方法をとる。 ○自分知 ・一緒に目的を達成することで、もっと仲良くできる。
ゆり組のお兄さん お姉さん [国際+人間]	○内容知 ・世界にはいろいろな国があり、それぞれの文化を持っていることに気付く。 ○方法知 ・もっと詳しく知るために、相手のことを考え聞き方を工夫して質問する。 ○自分知 ・クラス以外の友達を増やそうとする。

註：配当時間に関しては、研究紀要に記されていたものだけを記載した。

低学年児童は、国際理解についてまだ十分な理解ができておらず、前年度の研究でも「国際」や「環境」の学習においても「人間」が軸になってくることが見いだしている。研究開発の2年次では、「手」「顔」「分身」などを素材として取り上げているが、いずれも、身近な自分を感じる→様々な表現ができる自分を感じる→様々な自分の良さを感じる、といった学習過程をとり、自己理解を促進させ、自尊感情を高めるような指導がなされている。「生活科」の教材や「国際」「環境」単元の教材と比べて、「人間」は学習対象が対象化しにくいいため、「自分知」に焦点を充てる指導が試みられている。他方、「環境」単元は、教材開発が十分になされていないことも分かる。低学年の場合、一方で「生活科」対応の「総合学習（広め）」があるので、無理に子どもの発達段階に即さないような「環境」単元を盛り込む必然性は、ないかもしれない。

次に、表3-3、表3-4に中学年の年間指導計画（1996年度）を示そう。中学年における「総合学習」の単元開発に際しては、問題解決学習と活動・体験を重視している。素材の選定に際しては、子どもにとっての切実感・必要感を大切にしている。生活に密着し身近な素材として、トンボ・タンポポ・おもちゃなどが取り上げられている。「内容知」に関しては、多くの学習が「人間」を軸に据えられ、「国際」や「環境」を融合する形態が採られており、「方法知」に関しては、学習の結果ではなく、学習の過程で獲得できるような工夫が凝らされ、振り返り・コミュニケーション・情報の活用などが重視されている。「自分知」に関しては、学習による変容を子どもの自分自身への気づきや意識の変化として捉え直している。

最後に、表3-5、表3-6に高学年の年間指導計画（1996年度）を示そう。高学年における「総合学習」の単元は、3領域が融合されたものが多く、より高いレベルでの活動や体験を希求している。「内容知」に関しては、自然環境と人間生活との関連性、人間の生き方を見つめる自己の可能性、異文化間に存在する課題性の中に問題意識を持たせ、「内容知」の広まりを求めている。「方法知」に関しては、視点の複合化、情報収集・加工の多様さ、コミュニケーションと自己の論理の構築を求め、「方法知」の高まりを求めている。「自分知」に関しては、循環・共存の視点を基に、自然環境への働きかけを、まず自己の生活から見つめていくことや、自己のよさを実感したり、自己の価値を再発見したりして、よりよい生き方を求めることや、共生の視点を基に、共に生きていくことの価値を自分なりに見いだすことができることを求め、「自分知」の深まりを追究させている。

表 3-3 第 3 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
<p>タンポポって ざっ草?</p> <p>[環境+人間]</p> <p>14 時間</p>	<p>○内容知 ・身の周りにはさまざまな野草があり、それぞれが生活環境をもっている。</p> <p>・野草は雑草という呼び方は、人間の都合でつけたものである。</p> <p>○方法知 ・タンポポと自分との関わりを探るために、遊んだり、食べたりすることを通して親しみ、自らタンポポに働きかける。</p> <p>・タンポポへの見方を広げるために、友達と共に活動する。</p> <p>○自分知 ・タンポポを含めた野草を命あるものとして受けとめ、自分の考えをもって関わっていかうとする。</p>
<p>みんなで作ろう カレーライス (学級の人間関係をつくる)</p> <p>[人間]</p> <p>7 時間</p>	<p>○内容知 ・私たちの身の回りには、いろいろな人が生活し、関わりをもっている。</p> <p>○方法知 ・欲しい材料を手に入れるために、情報を集める。</p> <p>・問題解決の糸口をつかもうとするために、友達と共に活動する。</p> <p>○自分知 ・自分一人ではできないことも、友達と協力すると、できることに気付く。</p>
<p>大泉フリータイム学習</p> <p>20 時間</p>	<p>○内容知 ・学校の周りには、この地域ならではの自然や歴史などがあることに気付く。</p> <p>○方法知 ・調べたいことをはっきりさせるために、身近なものの中から、興味を持った素材を見つけ、関わる。</p> <p>・自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。</p> <p>○自分知 ・自分は何を知りたいのか、はっきりさせようとする。</p> <p>・身の回りのことで、自分が興味を持ったことについて自分から進んで調べていかうとする。</p>
<p>日本を とびだそう</p> <p>[国際+人間]</p> <p>13 時間</p>	<p>○内容知 ・外国の生活や習慣、文化には、日本とは違うものがある。</p> <p>・私たちの暮らす日本には、特色のある生活や習慣、文化がある。</p> <p>○方法知 ・視野を広げるために、異文化と接したり、外国の人とコミュニケーションしたりする。</p> <p>・日本と外国のよさをつかむために、自分の立場や相手の立場で見たり考えたりする。</p> <p>○自分知 ・日本と外国の違いの中に互いのよさを見いだそうとする。</p>
<p>どうやって 伝えようか</p> <p>[人間]</p> <p>11 時間</p>	<p>○内容知 ・コミュニケーションする方法はさまざまなものがある。</p> <p>・コミュニケーションは、その状況や目的・対象などによって違ったり、意識しなくても伝わったりするものがある。</p> <p>○方法知 ・コミュニケーションするために、その障害となるものをいろいろな視点から考える。</p> <p>・相手とコミュニケーションするために、相手の気持ちやその目的・方法などを考える。</p> <p>○自分知 ・自分は、いつも友達に何かを伝えようとしていることに気付く。</p> <p>・自分のことを相手に正確に伝えたい。</p>
<p>富浦フリータイム学習</p> <p>5 時間</p>	<p>(活動は第 4 学年へ継続する)</p>

表 3-4 第 4 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
富浦フリータイム学習 (活動は第 3 学年から継続) 20 時間	○内容知 ・富浦の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みさに気付く。 ○方法知 ・調べたいことをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から興味が持てる素材を見つけ、関わる。 ・自分なりの追究をするために、試行錯誤しながら自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。 ・自分の追究の足どりを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。 ○自分知 ・自分は何が知りたいのか、はっきりさせようとする。 ・身の回りのことで、自分が興味を持ったことについて、深く詳しく調べていこうとする。
学校に トンボを呼ぼう [環境+人間] 12 時間	○内容知 ・プールや池の中には、様々な生き物が生きている。 ・ヤゴ(トンボの幼虫)は、水の中の環境と深く関わりをもって生きている。 ・トンボは自分の暮らしにあった環境を求めやってくる。 ○方法知 ・自分と環境との関わりについて考えるために、トンボの視点から環境を見つめる。 ・トンボの生きる環境を考えるために、身の回りの環境に自分から働きかける。 ○自分知 ・自分なりの考えをもって生き物に関わっていこうとする。 ・自分の周りの自然には、様々な生き物が命を育むための優れた仕組みがあることを見つけようとする。
おもちゃって 何だろう [人間] 14 時間	○内容知 ・みんなが遊んでいるおもちゃにはいろいろな特徴や違いがある。 ・みんなのおもちゃには一人一人の思いや願いがある。 ・あんまり遊んだ事のないおもちゃにもそれぞれのよさがある。 ○方法知 ・おもちゃのよさを追究するために、おもちゃの選び方(流行、新旧、自分の成長)に目を向ける。 ・自分のおもちゃに対する考えを深めたり広げたりするために、自分と違うおもちゃを選んだ友達と交流する。 ○自分知 ・ふだん、何気なく遊んでいた自分のおもちゃには、いろいろなよさがあることに気付く。 ・いろいろなおもちゃに浸ったり、それを使って遊んだりすることを通して、自分が成長していたことに気付く。
みんなの名前 (学級の問題への取り組み) [人間] 8 時間	○内容知 ・名前には家族の思いや願いがあることに気付く。 ・友達にもみんな家族があり、一人一人が大切な存在であることに気付く。 ○方法知 ・よりよい人間関係を築くために、相手の気持ちや立場をよく考えたり、確かに自分を伝えたり、自分を振り返ったりする。 ○自分知 ・人権を大切にしよりよい人間関係を築いていこうとする。 ・自分の生き方について見つめ直そうとする。
今、わたしたちに できること [国際+人間] 11 時間	○内容知 ・私たちの身の回りには、様々な人々が関わりながら共に生きている。 ○方法知 ・「してあげる」「やってあげる」の考え方から、「なすこと」によって学ぶ」の考え方で接する。 ・自分にできることを見つけるために、様々なコミュニケーションを通して相手の気持ちや立場を考える。 ○自分知 ・身の回りに生きる人々は誰でも、よりよくの願いをもって共に生活している。
箱根フリータイム学習	5 時間 (活動は第 5 学年へ継続する)

表 3-5 第 5 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
箱根フリータイム学習 (活動は第 4 学年から継続) 15 時間	<p>○内容知 ・箱根の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みさに気付く。</p> <p>○方法知 ・自分のテーマをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から、興味や疑問が持てる素材を見つけ関わる。 ・自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、見通しを持って必要な物の準備や資料情報の収集を行う。 ・自分の追究の足どりを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。 ・自分の追究方法や発表方法を高めていくために、友達の追究や発表のよさを見いだす。</p> <p>○自分知 ・自分のこだわっている物や考え方に気付き、それらに関連することについて、常に関心を持つとする。 ・各教科、領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に対し進んで学習を深めていこうとする。</p>
びん、缶、ペットボトル 君ならどれを選ぶ？ [環境]	<p>○内容知 ・社会にはリサイクルの仕組みがあり、その仕組みにうまくのっている物とそうでない物があることがわかる。</p> <p>○方法知 ・自分が選択するために、情報を関係機関へ問い合わせなどして集め、情報を比較しながら多くの視点から判断していく。</p> <p>○自分知 ・リサイクルの視点で自分の生活を振り返ったり、リサイクルの仕組みに自ら関わったりして生活をしていく。</p>
アッチャー 手で食べよう [国際]	<p>○内容知 ・外国の食事の習慣と日本の食事の習慣との違いや類似点を探り、各国の食文化を知る。</p> <p>○方法知 ・その国の文化(生活習慣やその背景)を知るために、日本の文化と比較したり、その国の人を通して文化を探っていく。</p> <p>○自分知 ・違いの意味を捉え、自国文化、異文化のよさを見つめ、共に認め合おうとする。</p>
自分らしさとは [人間]	<p>○内容知 ・人々には様々な長所、短所があり、価値観も多様であることがわかる。</p> <p>○方法知 ・自分のあり方を探すために、身の回りの文化、価値観を整理、比較しながら自分について考えていく。</p> <p>○自分知 ・お互いのよさに目を向けながら、自分らしさや自分のやりたいことを大切にしていこうとする。</p>
自分にとっての土とは [環境+人間] 12 時間	<p>○内容知 ・自然や生活の中で土は重要な役割をしていること、自然を取り戻すには時間がかかることがわかる。</p> <p>○方法知 ・自然をよく知るには、様々な立場から対象を見たり、関連づけて考えたり、直接関わっていくとよいことがわかる。</p> <p>○自分知 ・自然の素晴らしさを感じ、豊かな環境にしていこうとする。</p>
日光フリータイム学習	(活動は第 6 学年へ継続する)

註：配当時間に関しては、研究紀要に記されていたものだけを記載した。

表 3-6 第 6 学年の「総合学習」の単元 (1996 年度)

単 元 名	単 元 の ね ら い
日光フリータイム学習 (活動は第 5 学年から継続)	<p>○内容知 ・ 日光の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みさに気付く。</p> <p>○方法知 ・ 自分のテーマを深めたり、絞ったりするために、これまでのフリータイムとの関連を考えながら、興味や疑問が持てる素材を見つけ、関わる。</p> <p>・ 自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、見通しを持って必要な物の準備や資料情報の収集を行う。</p> <p>・ 自分の追究の足どりを誰にでもわかってもらうために、聞き手に応じて工夫をして発表する。</p> <p>・ 自分の追究方法や発表方法を高めるために、友達の追究や発表からのよさを見いだす。</p> <p>○自分知 ・ 自分のこだわっている物や考え方に気付き、それらに関連することについて、常に関心を持とうとする。</p> <p>・ 各教科、領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に対し進んで学習を深めていこうとする。</p>
わたしと環境 [環境+人間]	<p>○内容知 ・ 生き物を通して、自然の営みを人間との関わりでとらえる。</p> <p>○方法知 ・ 自然と人間の関係をとらえるために、立場を入れ替えたり、実体験を根拠にして考えていく。</p> <p>○自分知 ・ 共存の視点を通して環境に対する望ましい関わり方や人間の生き方を考えていく。</p>
英雄像を考える [人間] 12 時間	<p>○内容知 ・ 英雄とは自己変革の中で夢をつかみ、自分の生を精一杯生きた人物であり、人によって英雄は様々であることがわかる。</p> <p>○方法知 ・ 英雄の英雄らしさをはっきりさせるために、情報を集めたり、自分自身と英雄との生き方を比べて考えていく。</p> <p>○自分知 ・ 自分や友達、英雄の中に共通点を見だし、自分も高まっていこうという気持ちになる。</p>
外国の友達と交流しよう [国際]	<p>○内容知 ・ その国の人々の歴史や文化とその特色、日本とその国との交流の様子がわかる。</p> <p>○方法知 ・ その国の子どもたちや在日外国人の方との交流を通して確かな理解の上に立ったコミュニケーションの大切さに気付く。</p> <p>○自分知 ・ その国のよさや日本との共通性に目を向け、両国の友好や交流を進めていける自分に気付く。</p>
卒業に向けて —オペレッタで伝えよう— [人間+音楽]	<p>○内容知 ・ 自分と友達との願いや考えには、違いや共通点があること、それぞれが様々な持ち味を持っていることがわかる。</p> <p>○方法知 ・ 自分たちの思いを伝えていくために、自分に合った表現方法を選択し、友達と協力しながら自分の役割を果たしていく。</p> <p>○自分知 ・ 持ち味を発揮できた自分や友達のよさに気付きながら、一つのことに向かって力を合わせて創り出していくことの素晴らしさを感じ取っていく。</p>
静岡フリータイム学習	

注：配当時間に関しては、研究紀要に記されていたものだけを記載した。

(4) 「総合学習」の授業の分析

次に、授業実践を取り上げ、検討してみよう。

A. 「『アンニョン!』～なかよくしてね!～」の実践 (1年)

本実践は研究開発初年次の「国際」単元の実践で、第1学年の2～3学期に行われたものである。東京韓国学校初等部との交流を通して、異文化理解を図ろうとするものである。13時間配当の実践で、第1次(「アンニョン ハセヨ!」はじめまして!; 5時間)、第2次(「カムサハムニダ!」またあそぼうよ!; 3時間)、第3次(「オソオセヨ!」いっしょにあそぼう!; 5時間)からなっている。

授業の流れは以下のようになっている。第1次では、最初に韓国学校と交流するためにきく組のペナントを作らせ、ペナント作りを通して、自分の所属する学級・学校、さらに国についての意識を高めさせている。次に、韓国のおやつを食べて興味・関心を高めさせたり、ビデオや写真を通して、友達になろうとしている学校のことを知るよう努め、これらを踏まえて韓国学校の1年生との交流を行う。第2次では、韓国学校の訪問で印象に残ったことや質問などを手紙に書かせ、次の交流の機会には何をして遊びたいか、話し合わせる。第3次では、それぞれの学校で遊びたいものや、遊べるものを話し合い、一緒に遊ぶ準備を行い、交流を深める。

この単元の授業の目標を挙げておこう。

①「内容知」

- ・ 韓国の言葉や食べ物、遊びなどに興味を持つことができる。
- ・ 韓国の友達は、違う言葉話し、食べ物や遊びなどには、日本とは違うものや似ているものがあることに気付く。

②「方法知」

- ・ 言葉が通じなくても、互いにわかり合える方法があることに気付き、様々な方法を使って(まねる、身ぶり、絵などで)わかり合う。
- ・ 共に活動する遊びやゲーム、会食、創作などを通して、仲良くする。

③「自分知」

- ・ 友達からたくさんの学ぶことを見つけ、友達をたくさん増やそうとする。
- ・ 外国の文化に浸ることを通して、その良さを感じることができる。

国際理解教育の実践では、その多くはアメリカやヨーロッパの国々を対象とし、英語の学習を導入したり、ALT (Assistant Language Teacher) との交流で終始しているものが多い。附属大泉小学校では、アジアの国の1つである韓国を交流の対象国として取り上げている点が注目できる。事前に子どもに知っている国とその内容を調査しているが、何らかの知識を持っている国は21か国であった。しかし、第1位である中国を除けば、そのほとんどが欧米に偏している²⁾。「近くて遠い国」であるアジア諸国に目を向けた教材の開発が求められるところである。

導入部で韓国のお菓子を食べたり、ハングル文字と日本語の文字との違いに注目させたり、簡単な韓国語の挨拶をさせたりすることで、関心・興味を高めさせ、異文化の理解を促進させている。1年生の段階では、思考を通して異文化を理解することは困難であり、体験・五感を通

して理解させることが大切である。その意味で遊びやゲームを活用していることも意義がある。また、言葉が理解できなくても、ノンバーバル・コミュニケーションを重視している点も注目に値する。この実践の一部で、韓国学校の教師とチーム・ティーチングを取り入れていることも、言葉の壁を克服するためには有効であると言えよう。

研究開発の初年次の「国際」単元の実践では、第2・3学年でも韓国学校との交流を行っている。子どもの発達段階に対応した授業がなされている³⁾が、スパイラルな形で、系統性に配慮しながら深化・総合化を図っていくことが大切である。他の学校の交流に際しては、相手校の選択や時間的調整など様々な困難点が生じやすいが、長期的な視点で交流をしていくことが望ましい。

B. 「タンポポって雑草？」の実践（3年）

本実践は研究開発2年次の「環境」単元を中核に「人間」単元を加味した実践で、第3学年の1学期後半に行われたものである。3年生の1学期という時期は、「理科」「社会」が初めて登場するが、まだ論理的な思考をすることが十分にできない時期である。体験を通して、環境問題を中心に据えた自然認識の形成と問題解決能力の育成を目指した実践であると言えよう。14時間配当の実践で、第1次（身のまわりの野草を探そう；3時間）、第2次（タンポポの秘密をさぐろう！；5時間）、第3次（タンポポって雑草？；3時間）、第4次（タンポポと話そう；3時間）からなっている。

授業の流れは以下のようになっている。第1次では、最初に自然に生えている草はどこにあるのか考えさせ、実際に確かめに出かけさせ、各自採ってきた草を地図の上に置いたり、絵カードにして貼ったりさせた。次に、子どもにとって見つけやすいタンポポに対象を絞り、その特徴や発見したことを発表させ、タンポポの生育場所を確認する。第2次では、タンポポの好きな場所はどこか班単位でフィールド調査を行わせている。その中で、コンクリートから生えているタンポポを取り上げ、タンポポの生命力の強さ・不思議さを考えたり、様々なタンポポの秘密を子ども同士で知らせ合ったりさせ、タンポポを用いた遊びなども行っている。第3次では、タンポポを素材とした食べ物を試食させ、タンポポパーティの開催の可能性や、採ったタンポポをどうするのか議論させている。そして、タンポポと人間との差異点と共通点について議論し、もしタンポポと話が出来るならば、どういう対話ができるか表現させた。第4次では、タンポポは雑草なのか議論させ、タンポポへの気持ちの変化を記録させた。

この単元の授業の目標は表3-3に示す通りである。授業のねらいとしては、タンポポと人間との共存・共生について考えさせることであると言えよう。しかし、「内容知」「方法知」「自分知」のウェイトの置き方によっては、ねらいが十分に生かされない危険性が内包しているだろう。これは、幾つかの環境教育の実践に見られるものであるが、可愛そうだからと捉えたり、アニミズムの思考が全面に出たりする場合がある。この種の誤りは自然認識の形成の軽視と関係が強い。本実践では、タンポポを擬人化してはいないが、タンポポへの愛着を意図すれば、科学的な認識との結びつきが希薄になる恐れがあるだろう。

本実践で興味深い点は、フィールドワークに時間をかけている点と、第2次でタンポポと親しませた後、第3次で大量のタンポポが必要となるタンポポパーティの開催を企画し、葛藤状況を子どもに引き起こさせようと工夫した点である。授業者の反省にあるように、実際の授業ではタンポポを採るかどうかの葛藤場面にはいかなかったが、食物連鎖や弱肉強食の問題を取

り上げる際には有効な手法であろう。3年生では雑草という概念がまだ曖昧であり、4年生以降で取り上げた方が良かったかもしれない。また、「環境」単元に「人間」単元を加味しようとして、人間との共生を過度に強調すれば、心情主義的な学習に傾斜する恐れがある。むしろ、「道徳」の単元「自然・動植物愛護」の深化・総合の実践として行うか、「環境」単元としてのみに絞った方が、すっきりするのではないだろうか。

C.『男らしさ、女らしさとは』の実践 (5年)

本実践は研究開発初年次の「人間」単元の実践で、第5学年の2学期前半に行われたものである。6時間配当の実践で、第1次(「おんなの子のマーチ」(島田陽子)を読んで、「男らしさ、女らしさ」について考えていることを話し合う; 2時間)、第2次(「男女の人間関係」について掘り下げて考えたいテーマを探し、自分なりの方法で追究する; 3時間)、第3次(「自分らしさ」について考えたことを書く; 1時間)からなっている。

授業の流れは以下のようになっている。第1次では、まず「おんなの子のマーチ」を読ませ、感想を話し合った後、自分のマーチを作らせる。A子・B男の詩を読み、それぞれの言い分を聞き、さらに「男らしさ、女らしさ」について考えていることを話し合い、身近なところから材料を集めて、「男らしさ、女らしさ」「男女の違い」はあるのか調べさせる。実際にスポーツ(サッカー・バスケット・手打ち野球)を体験することによって、「男らしさ、女らしさ」の違いはあるのかどうかの追究もさせている。第2次では、「男女の人間関係」について掘り下げて考えたいテーマを探して追究し、お互いに考えを聞き合う。そして、第3次では自分の考えの変わってきたところやはっきりしてきたところをまとめさせる。この過程を通して、「男らしさ、女らしさ」からの解放を目指すことを意図した実践である。

この単元の授業の目標を挙げておこう。

①「内容知」

- ・身近な生活の中から情報や資料を集めることを通して、男女の違いや共通性に関する認識を深める。

②「方法知」

- ・自分の本音に気付いたり資料をもとに話し合ったりすることを通して、身近な男女の違いに対する自分なりの考えをはっきりさせることができる。

③「自分知」

- ・男子、女子という性別的性格の違いを乗り越え、自分らしいよりよい生き方を探ろうとする。

思春期前期に位置づく小学校高学年生は、自我の目覚めや異性に対する意識の変容(対立と悩み)が見られる時期である。この時期に、性役割や性差について考えさせる授業は、時宜にかなっていると言えよう。ジェンダーの問題は、性教育の問題と比べると、これまで「総合学習」で取り上げられることは少なかったが、男女共生社会を迎えるに際してますます重要なテーマとなるものである。

本実践では、導入部で「おんなの子のマーチ」を読ませ、さらに「自分のマーチ」を創作させている点は、興味深い。「男らしさ」「女らしさ」は普段あまり自覚しないことが多いので、「国語」の教材を用いたり、詩・作文を作らせることによって、自分を見つめ直し、「もう一人

の自分」を探し出すことが可能になる。性差に関して、スポーツや服装、職業、言葉遣いなど、身近な素材に注目をさせ、調べさせている点は子どもの興味・関心を引き出しやすく、望ましいものである。

相撲を取り上げ、女性が土俵に上がれないことの賛否について議論させている点も、伝統や体力の問題と結び付けて考えることにつながり、多角的な視点での捉えがなされており、評価できる。さらに、性役割や性差別の問題を考えることを通して、「自分らしさ」を再発見させる契機となったことも、本実践の成果と言えよう。さらに、「道德」の単元「信頼・友情と男女の協力」と結び付けて、深化・総合化をはかることも可能であるかもしれない。

(5) 評価の方法

学校公開時の指導案では、初年次では評価項目が記載されていたが、2年次では記載されていない。「総合学習」の評価については、まだ研究途上にあるといっても過言ではない。本論文では、初年次の学校公開時の授業の評価について紹介し、検討を加えることにしたい。

A. 「国際」単元

第1学年 『「アンニョン！」 なかよくしてね』

- ・東京韓国学校の友達との交流を楽しみにし、互いの国の遊びを通して交流を深めようとすることができたか。

第6学年 『北京・黑芝麻胡同小学の子どもたちと仲よくなろう』

- ・中国の方の人柄を感じながら、自分の中国イメージをより正しく豊かにできたか。

B. 「環境」単元

第2学年 『さがしてみよう～木となかよくしよう～』

- ・これまでの活動や木に対する気づきを生かしたり、自分の思いを持って活動に取り組んでいたか。

第6学年 『わたしと環境～「蚊とわたし」から考えよう～』

- ・環境に関わっている自分の生き方について、自分なりの考え方を持つことができたか。

C. 「人間」単元

第1学年 『変身して遊ぼう』

- ・お面をつけることによって、なりたいものになりきり、他のものに変身する楽しさを味わうことができたか。

第5学年 『わたしたちの「文化」ってなんだろう』

- ・話し合いの中で、「文化」に対する自分の考えが変わってきているという実感が持てたか。

いずれも評価項目は1つのみであるが、活動や体験を評価するものが多い。関心や意欲、気付きレベルでの評価が多く、「内容知」よりも「自分知」の評価が中心となっている。それ故、方向目標としては一定の範囲で評価できるものの、到達目標として設定することは困難である。「総合学習」に対する評価のあり方については、多様な意見があるが、認識レベル（附属大泉小学校では「内容知」に関わるもの）の評価は、必要ではないかと思われる。

次に、通知表での評価について触れておこう。1996年度の通知表を図2-1と図2-2に示す。第2学年の「広め学習」では、2項目について2段階評価を行い、特記事項欄を設けている。第

●広め学習 (学習の評価…○印は目標に向かって努力している, △印はもう少し努力を要することを示す。)

学 習 の ね ら い	評 価			特 記 事 項
	一 学 期	二 学 期	三 学 期	
・楽しく活動しながら, 次に取り組みたいことを見つける。				
・気づいたことや思ったことを工夫して表現する。				

図 2-1 通知表における「広め学習」の評価項目 (1996 年度 第 2 学年)

●深め学習に対する取り組み (学習の評価…○印は目標に達している, △印は達していないことを示す。)

学 習 の ね ら い	評 価			特 記 事 項
	一 学 期	二 学 期	三 学 期	
・興味, 関心があることを進んで追求する。				
・体験を大切に活動する。				

図 2-2 通知表における「深め学習」の評価項目 (1996 年度 第 6 学年)

6 学年の「深め学習」でも, 2 項目について 2 段階評価を行っている。いずれも, 体験・活動を中心とした評価であり, 具体的な到達目標を提示して評価する「到達度評価型」の通知表にはなっていない(「国語」「算数」などの他教科も同様)。この点は, 評価研究の不十分さを感じる。「総合学習」は子どもの個性が大きく現れ, 多様な活動が見られるが, 子どもの個性や「よさ」を評価するという視点に立つならば, 自由記述の併用も必要であろう。今後の評価研究の発展を期待したい。

3 残された課題

本論文では, 教育課程の領域の再編ではなく, 「総合学習」を全学年にわたって設定し, 「国際」「環境」「人間」の 3 領域を中心に研究開発を行っている東京学芸大学附属大泉小学校の事例を取り上げ, 検討を行った。体験重視・問題解決学習の積極的導入という視点に立った実践であり, 概ね好感が持てる実践が多い。前報告(藤岡, 1996b)で取り上げた福島大学教育学部附属小学校が開発した新教科の内容と共通点が多い。また, 学力を 3 つの「知」(「内容知」「方法知」「自分知」)として捉えている点は, 他校の実践には見られないユニークなものである。この 3 つの「知」は必ずしも, 「新しい学力観」とオーバーラップするものとは言えない点も留意しておきたい。これまであまり焦点が充てられてこなかった「方法知」「自分知」について, どのような指導を行うべきか, 「総合学習」のみならず教科学習でも検討すべきであろう。

今後の課題としては, 前述したように「総合学習」の授業における評価をどうするのか, 及び子どもの発達段階にふさわしい教材開発をどう進めるか——という 2 点である。学校公開時の授業参観を通して感じた点は, 「国際」単元や「環境」単元と比べると, 「人間」単元の目標やねらいは曖昧になりやすく, 焦点が定まりにくいことである。価値観の多様化の時代にどの

ような目標やねらいを設定すべきなのか。また、「人間」単元は、教材内容や指導のあり方によっては、心情主義に陥ったり、「第2道徳」になったりする危険性もないとはいき切れない。そのような点をどう克服していくかが、問われている。

ところで、1996年7月に出席した中央教育審議会第一次答申では「総合的な学習の時間」が提言されている。「総合学習」を行っている小学校はほとんど見られない⁴⁾ (例えば、藤岡(1996a)の調査結果)が、今後「総合学習」に取り組む学校が急増するものと思われる。ブームだから取り組むという姿勢ではなく、「総合学習」でどのような学力を育成するのか、「生きて働く学力」をどう規定するのか、体験・活動の内容をどのようなものにするのか、などを明確にして取り組むべきであろう。

[註]

- 1) 第1学年では標準時数の59%、第2学年では標準時数の72%、第3・4学年では標準時数の81%、第5・6学年では標準時数の78%となっている。
- 2) 聞いたことのある国名では、中国、フランス、アメリカ、オーストラリア、ブラジルの順に5位までを占め、内容について知っている国は、中国(40名; 漢字・ラーメン・ギョーザなど)、エジプト(9名; スフィンクス・ピラミッド・砂漠など)、フランス(7名; 核兵器・フランスパン・エッフェル塔など)、オーストラリア(6名; コアラ・カンガルーなど)、スイス(4名; 時計・サッカー)の順に5位までを占めていた。韓国については、国名を聞いたことがある者が11名(22位)、知っている内容は「キムチ」で僅か1名の回答のみであった。
- 3) 第2学年では、遊びを中心に、民族衣装や伝承遊び、日本の伝承遊びやわらべ歌、折り紙などを教材として取り上げ、第3学年では、日本と韓国の料理やおやつを取り上げ、異文化と自国文化の共通点・差異点を認識させている。
- 4) 「総合学習」を実践している学校は少ないが、優れた実践も散見する。「総合学習」の実践における先進校の概要をまとめたものとしては、藤岡(1997)と平野(1995)がある。「総合学習」と一口で言っても、内容は多岐にわたっている。中央教育審議会や教育課程審議会がどのような答申を出すのか、注意を払う必要がある。

[付 記]

通知表ならびに諸資料を送って下さりました東京学芸大学附属大泉小学校の梅澤実先生と小山恵美子先生に厚く感謝いたします。

文 献

- 藤岡秀樹 1996a 「生活科」の教育心理学的研究——「生活科」の授業づくりと評価を中心として——
文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 藤岡秀樹 1996b 小学校における新教科の研究開発動向について(1) 岩手大学教育学部研究年報,
56(1), 139-152.
- 藤岡秀樹 1997 小学校における総合学習についての研究——実践校の分析を中心に—— 岩手大学

教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 7, 205-222.

平野朝久(編) 1995 子どもが求め, 追究する総合学習 学芸図書

児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校 1995 学習をつくる 生活をつくる 自分をつくる——豊かな学力をどう育てるか—— ぎょうせい

三石初雄 1996 小学校教育課程再編の動き 佐藤年明(編)「生活科」における合科的教材の開発とその指導力量形成に関する研究 文部省科学研究費補助金研究成果報告書 Pp. 15-30.

東京学芸大学附属大泉小学校 1996 平成7年度研究紀要 豊かな学力の育成——『国際』『環境』『人間』総合単元の創造——

東京学芸大学附属大泉小学校 1997 平成8年度研究紀要 豊かな学力の育成——総合学習の創造——